

2024年7月29日

福岡県保育協会 令和6年度新任保育士等研修会(前期)

子どもの人権を「守り」「育む」保育①

常磐会短期大学

卜田 真一郎

はじめに：子どもの「居場所」を考える

子どもの「居場所」を巡る問題を考える

人間にとって居場所を失うということ



健全な居場所が保障されること
健全な居場所を創り出す力を育むこと

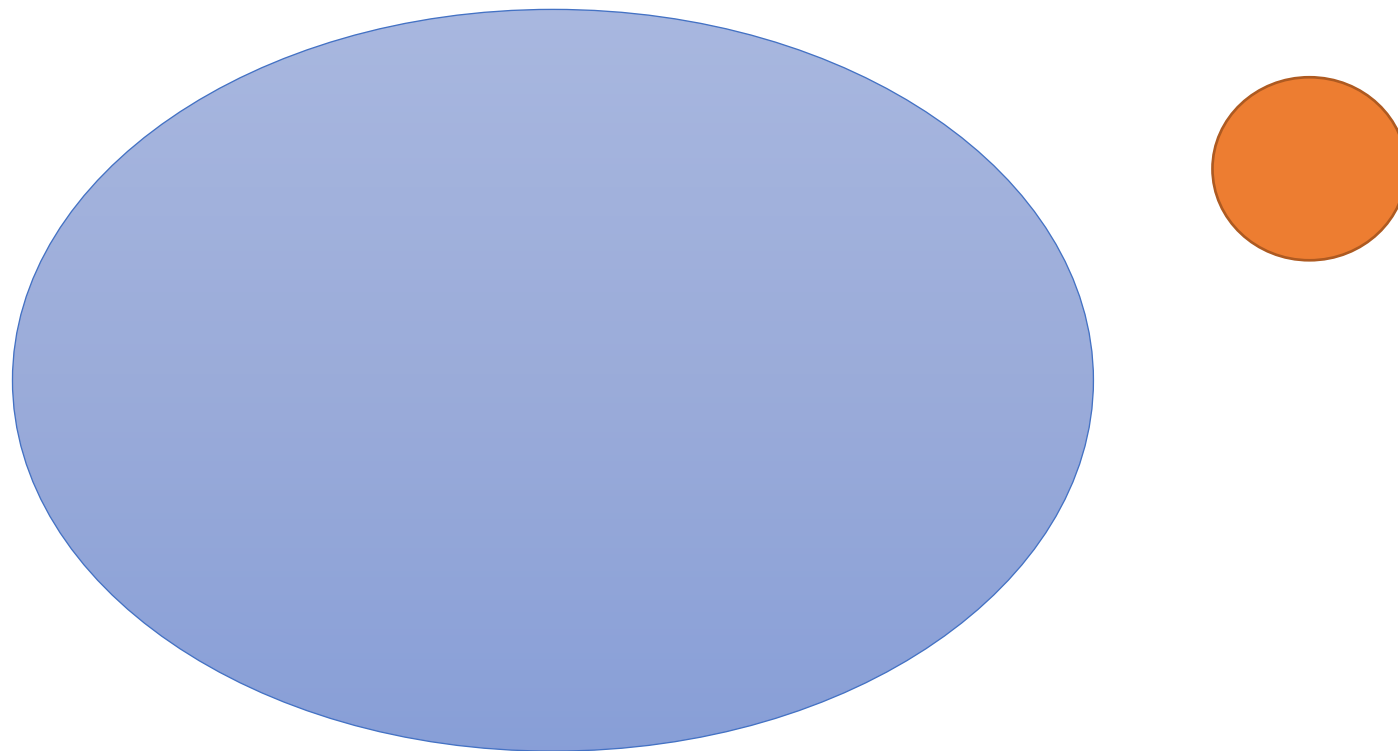
居場所を考える上で問われるべきこととして…

「現在の社会の中で居場所を見つけようとする」と

「すべての人に居場所がある社会を創ろうとする」とは同義ではない

- 現行の学習指導要領の改訂で示された「社会に開かれた教育課程」という考え方→諸刃の剣
 - 「社会に開かれた教育課程」の考え方はどこに向かうのか？
 - 「現実の社会にある矛盾や課題に向き合い、全ての人が幸せに暮らせるような社会づくり」に向かう？
 - 「現在の競争社会を肯定し、それを生き抜くことができる『都合の良い人材』の育成」に向かう？
- 結果的に創り出される将来の社会のありようが大きく変わる

多様化する社会はどこに向かうべきか？



問題が起こるのは、相違点それ自体があることではなく、相違点にみんながどのように反応しているかによって起こるのです。

(L.ダーマン・スパークス□「ななめから見ない保育」より)

絵本「おにごっこする？」が提起すること

- 絵本「おにごっこする？」は、「さまざまな個性を持った人と一緒に生きていくためにはどうしたらいいのか？」ということを考え、共に生きることを実践できるためのセンスを身につける」ことを具体化した絵本であると考えることができます。

絵本「おにごっこする？」

今井美之:文・岡島礼子:画

大阪市教育委員会「はーと&はーと」絵本コンクール

2002年度入賞作品



これからの世界は、今まで以上に
多様な人が同じ空間の中で生きている社会に向かうと思われる



だからこそ、「人権」という価値が重要になる
現実的な方向性としての「人権の尊重」

保育実践と「居場所」

健全な居場所が保障される



居場所の構成員になる



居場所を創り出す人になる

保育者は、本当にすべての子どもの居場所を創り出せているか
子どもたちが、全ての人の「居場所」を創りだせる保育をしているか

1、子どもの人権とは何か？

(1) 子どもの人権に関わる2つの課題

- 「子どもの人権」を如何に守るか？
→ 差別／虐待／貧困／戦争など
- 子ども自身の「人権意識」をどう育てるか？
→ 人権保育・教育の課題

(2) 子どもの権利の特質

- 子どもは「権利を行使する主体」であるが、発達的な特質から、自分で自己の権利を行使することが難しい。
- 故に、「権利を侵害する可能性のあるおとなに、自己の権利を行使する仲介をしてもらわなければならない」存在である。(玉置 1991)

それ故に、

- 「おとなが子どもを尊敬の対象として、侵すことのできない権利の主体として把握すること」が必要。

その為には、

1. おとなの子ども観・教育観の問い直し
2. 乳幼児は弱い立場にあることを自覚し、おとなのあり方を見直すこと
3. 人権の視点から、乳幼児を取り巻くおとなや社会的な環境を問い直すこと

が求められる。

(3) 「子どもの人権」をいかに守るか

- 前提として

子どもは社会的な存在であり、社会的な諸問題の影響をダイレクトに受けている。

例えば・・・

- 「児童虐待」

→ 虐待は、「子どもを愛せない悪い親」がいるから起こることなのか？

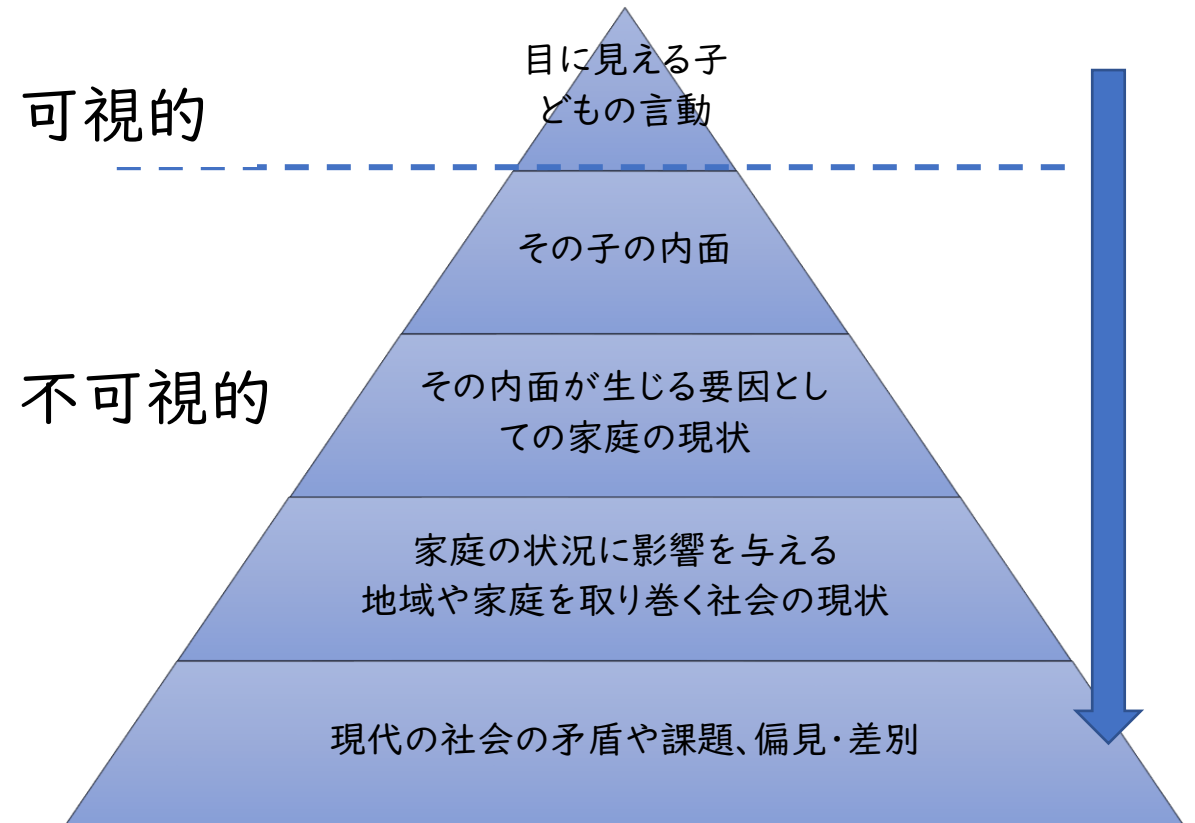
例: 杉山春(2013)「ルポ 虐待: 大阪二児置き去り死事件」、ちくま新書

- 「学力問題」

→ 学力と貧困問題の関連性

さまざまな差別・貧困・戦争等の問題も同様

- 子どもの側に立ち切ること
- 子どもが園で見せている姿の背景に気づくこと
- 保育者の人権への感性を高めることの必要性（人権研修、当事者との出会い、フィールドワーク）



このように考えていくと、子どもの人権を考える上で、次のことを確認する必要がある。

- 「子どもは社会の矛盾を直接的に受けている存在である」
- 特に、さまざまなマイノリティ性を持つ子どもたちは社会的に不利な状況に立たされたり、生きづらさを抱えさせられたりする可能性が高い
- 故に、システムやおとなが置かれた状況を問い直すことで、社会の矛盾を克服することが必要。



子どもの人権を守るための「仕組み」を作る

2、ユマニチュードから学ぶ

ユマニチュードとは？

- ユマニチュード (Humanitude) は、イブ・ジネストとロゼット・マレスコッティの2人によって作り出された、知覚・感情・言語による包括的コミュニケーションにもとづいたケアの技法。
- この技法は「**人とは何か**」「**ケアをする人とは何か**」を問う**哲学**と、それにもとづく150を超える実践技術から成り立っている。
- 認知症の方や高齢者のみならず、ケアを必要とするすべての人に使える、たいへん汎用性の高いもの。

→ 少し映像を見てみましょう。

目の前にいる健康に問題がある人、障害を持っている人、高齢の人を「個人」として尊重し、

- (1) その能力や状態を正しく観察し、評価と分析を行うこと、
- (2) 見つめ、話しかけ、触れ、立つことや移動を効果的にサポートすること
- (3) その行動の抑制も強制も行わない環境をつくること

ができれば、ケアを受ける人の能力を維持したり改善したりすることができる。



人間の尊厳を取り戻すための
「見る」「話す」「触れる」「立つ」ことの援助

なぜ、保育で「ユマニチュード」

「人間」として尊重される中で、子どもは「人間」として育つ

- 人間は相手がいなければ存在できません。あなたが私に対して人として尊重した態度をとり、人として尊重して話しかけてくれることによって、わたしは人間となるのです。わたしがここにいるのは、あなたがここにいてくれるからです。逆に、あなたがここにいるのも、わたしがここにいるからです。
- わたしが誰かをケアするとき、その中心にあるのは「その人」ではありません。ましてや、その人の「病気」ではありません。中心にあるのは、わたしとその人の「絆」です。

本田美和子、イヴ・ジネスト、ロゼット・マレスコッティ(2014)「ユマニチュード入門」、医学書院

○誰にとっての現実か

- 「ケアする人」にとっての現実からのみ、ケアの内容を決定していないか。

○ケアする人とされる人の権力関係からの解放

- ケアする側は権力を持っていて、患者や入居者を管理する発想に陥りがちだということです。ユマニチュードは個人の自由と自律を尊重し、だからこそ絆を重視します。私はあなたを管理する。この考えを持つ限り、相手との間に生じるのは力関係です。ユマニチュードは人と人との関係を紡ぎます。そのためには、あなたがいま持っている権力を脇に置かなければなりません。そうでないと目の前の人に近づくことはできないからです。

(イブ・ジネスト・ロゼットマレスコッティ著(2016)「『ユマニチュード』という革命」 誠文堂新光社 より)

ユマニチュードの技術の基本

見る	水平の視線は相手に平等な関係性を伝える。また、正面からしっかり見ることで正直さが伝わる。近くから、水平に、正面から、長いあいだ、瞳と瞳を合わせるという見方が、ポジティブさ、愛情を表現する。
話す	穏やかに、ゆっくり、前向きな言葉を用いて話しかける。相手から返事がないか、意図した反応がない場合は、自分の手の動きを実況中継する「オートフィードバック」を用いて、言葉を絶やさないようにする。
触れる	広い面積で、柔らかく、ゆっくり触れることで、優しさ、愛情を表現する。反対に、親指をかけて驚づかみにしたり指先で触れると、強制力や攻撃性を相手に感じさせてしまう。順序はもっとも敏感ではないところから、すなわち肩や背中から触れる。手や顔はとても敏感な部位である。
立つ	立つことで、軟骨や関節に栄養を行き渡らせ、呼吸器系や循環器系の機能が活発になり、また、血流がよくなることで褥瘡も予防する。さらに、立って歩くことは知性の根幹であり、人間であることの尊厳を自覚する手段でもある。

ユマニチュードの5つのステップ

<p>①出会いの準備 [来訪を伝える]</p>	<p>やり方は、3回ノックして3秒待つ、また3回ノックして3秒待つ、反応がなければ、1回ノックして室内に入る。ノックをすることによって、中にいる人に「誰かが自分に会いに来たこと」を知らせ、受け入れるかどうかを選択してもらうことができる。</p>
<p>②ケアの準備 [相手との関係性を築く (友だちになる)]</p>	<p>これから行なうケアの話をすぐにはせず、「あなたに会いに来た」というメッセージをまず伝える。正面から近づき、目と目を合わせ、瞳を捉えてから3秒以内に話し始める。ポジティブな言葉だけを使って話し、「見る・話す・触れる」の技術を用いる。3分以内に同意が得られなければ、いったんあきらめる。</p>
<p>③知覚の連結 [心地よいケアの実施]</p>	<p>ケアにおいて、「見る・話す・触れる」のうち、少なくとも2つ以上を同時に使いながら、あなたを大切に思っているというメッセージを継続的に届ける。優しく話しながら手を掴む、というような行動はメッセージに矛盾を生じさせる。自分が発するメッセージに調和を持たせながらケアを実施する。</p>
<p>④感情の固定 [ケアの心地よさを相手の記憶に残す]</p>	<p>感情に伴う記憶は、認知機能が低下した人にも最後まで残る。ケアが終わった後に、ケアが心地よかったことや、「あなたと一緒に過ごすことができ嬉しかった」などポジティブな言葉をかけ、ケアを素敵な経験として感情記憶に残す。</p>
<p>⑤再会の約束 [次回のケアを容易にするための準備]</p>	<p>認知症高齢者の場合、「また会いましょう」と言っても覚えていないかもしれないが、自分に優しくしてくれた人がまた会いに来てくれるという喜びや期待の感情は記憶にとどまり、次のケアのときに笑顔で迎えてくれる。</p>

「ユマニチュード」の視点から学ぶ ～「守るものとしての子どもの人権」という視点から～

1、「人間とは何か」という哲学から学ぶべきこと

- 「絆」の中で人間存在を捉えるという哲学
- 子どもは「人間として扱われているのか」という問い。特に「気になる子」「さまざまな背景を持った子ども」の場合。

→「関係性を育てる」意味の再確認

- 人間として扱われることによって、はじめて「主体」となる。

2、尊敬を土台とした「技術」という発想

- 子どもを人間として尊重する関わり・人間として尊重する保育とは？
- 子どもにとって園での生活はどのように認識されているのか、保育者の関わりはどのように認識されているのかを深く理解することから。(発達によって見える世界はおとなとは異なる。発達心理学の知見と保育方法が本来的な意味で「出会う」こと)
- 対象への確かな理解に基づく「技術」という発想へ(子どもの人権の立場にたった「保育方法論」の構築への課題。乳幼児への保育者の関わり方、活動の展開の仕方)

3、「技術」の背後にある「身体性」

- 尊敬を土台とした子どもとおとなの関わりにおける「身体性」と「感情への働きかけ」
- 子どもが「人間として尊重されている」感覚が持てる「居場所」を構成する要素は？
 - 自分の思いが受け止められる。存在が認められる（話しかけられる・見られる・触れられる）。人の中に「いる」、など。
- それを示すための保育者の関わりは？
 - 身体的レベル
 - 非言語的コミュニケーションのレベル
 - 言語的コミュニケーションのレベル・

「守る」ことから「育む」ことへ

子どもの人権を「守る」ことと、
子どもの人権力を「育む」ことは
どのような関係にあるのか？



「子どもを人間として尊重する」というおとなの態度は
「人間をヒトとして尊重するクラスのコミュニティの価値観」の
土台を形成する。

「子どもを人間として尊重するおとなの態度」は、
子どもたちの行動・物事への判断基準・価値観（子どもの人権力）を方向付ける要因の1つとなり
得る。

ただし、これはあくまでも「土台」であり、全てではない。
(おとなの態度論だけでは限界があることの自覚を)



**子どもの現実を捉え、
子ども自身の人権力をいかに育むかを明確にすることが必要。**

そのための保育者自身の視点の確かさが問われる

3、育むものとしての子どもの人権を考える

クラス集団作りを軸に考える

(1) クラス集団は「育てるもの」です

- 保育における「クラス」には、さまざまな個性をもった子どもたちが在籍しています。
- そのようなさまざまな個性をもった子どもたちが集まったクラスを、「集団として育てる」という視点を持つことが、クラス担任に求められている役割です。
- 本日は、クラス集団を「育てる」とはどのようなことなのか、そのために保育者は何を考えなければならないかを検討していきましょう。

(2) クラス作りは「コミュニティ」作り

① クラスは子どもにとっての「社会」(コミュニティ)

- クラス集団作りとは、さまざまな人が暮らす「クラスという社会」を形成すること
- みんなが生き生きと暮らせる「社会」とは?
 - 目指すべき社会をイメージする
 - 目指すべき社会はどのような「価値観」によって方向付けられた社会なのかを考える
- どのような価値観を育てるのかということが、「コミュニティづくり」の方向性の確定につながる。

②「気になる子」とクラスのコミュニティの関係

- 集団作りにおいて「誰を気にしていくのか」という問い
- 「気になる姿」は多様
- 「気になる姿」をクラスの子どもたちはどのように受け止めているのか？
- クラスの中での受け止め方が違えば、「気になる子」のクラスでの「暮らしやすさ」は異なる
 - 偏食の激しいAちゃん
 - 障がいのあるBちゃん
 - 自分の思いの表出が激しいCちゃん



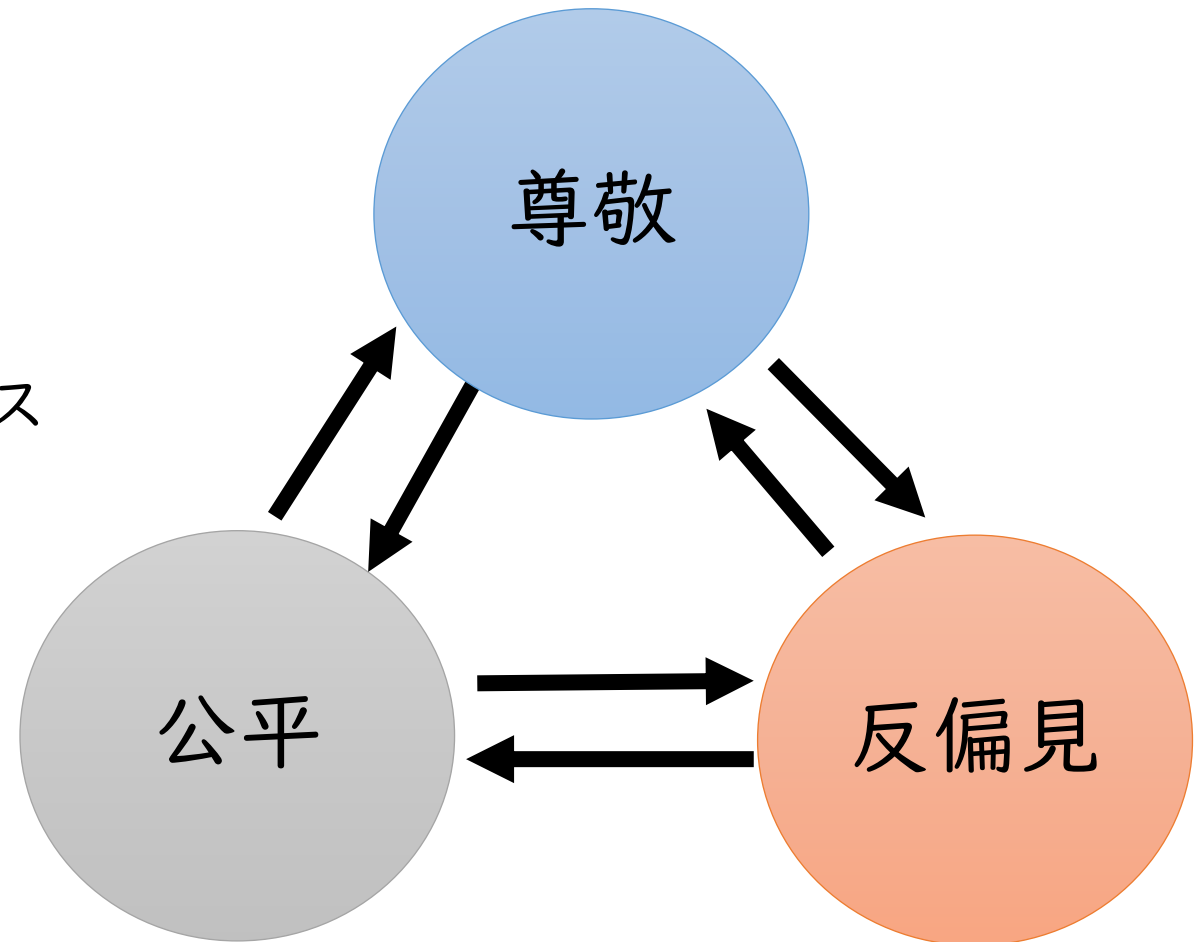
「すべての子どもがいきいきと過ごせるクラス」を実現するためには、
「クラスの中でいきいきできていない子」「保育者にとって気になる子」を
中核に据えていくことが必要

③コミュニティづくりの要は「価値観を育てる」こと

- どのような価値観をもった集団を育てるのかを考えることが、コミュニティとしてのクラスを育てることの第一歩です。
- 気になる子をクラスの中核と考え、その子と周囲の子が共に生き生きとできるようなクラスの価値観は何か、を考えることが必要です。
- 「気になる子」を取り巻く保育で重要なのは、「気になる子」自身が変わることだけではなく、その子を取り巻くクラスの子どもたち全体が、「さまざまな個性を持った人と一緒に生きていくためにはどうしたらいいのか？」ということを考え、共に生きることを実践できるためのセンスを身につけることです。そうした力を育むことが、将来、子どもたちが、「さまざまな人たちが共に暮らしていくことができる社会（真の共生社会）」の担い手になるためにも必要なのです。
- そうした意味で、多様化する社会の中で人々が共に暮らしていくために必要な力を育てるためには、「人々がお互いを尊重し合えるような価値観」「共生を実現できるような価値観を育てること」が重要になります。
- このように考えると、人権力のトライアングル（玉置 2009）として提起されている3つの視点は重要です。

(3) コミュニティのもつ価値観としての 「人権力のトライアングル」

- 「尊敬」のあるクラス
- 「公平」を追求できるクラス
- 「反偏見」という価値観があるクラス



①人間を尊敬する力（尊敬）

- 「自己への尊敬を追及する子ども」（自己コントロール・自立・自分への誇り・自信・自己肯定感・自己有用感など）
- 「他者への尊敬を追及する子ども」（仲間への関心・言うことを聞こうとする関わり・良さに気づく・相手の感情理解・その子の立場に立てる）
- 「命への尊敬を追及する子ども」（自分の命の尊重・命を支えてくれる人がいることに気づく・他者の命の尊重・動植物の命の尊重など）
- 「言う力・聞く力を持つ子ども」（自分の思いを言う・友達の発言を聞こうとする・一人ひとりのいうことを値打ちのあるものとして受け止めようとするなど）

②公平性の獲得（公平）

- お互いに自己主張して解決・調整の必要性を感じ、おとなの援助で公平な解決を体験



- 遊びの中で公平性を追求



- クラスの生活の中での公平性を追求



- 公平性の概念がわかり、適切に使える子ども。

③ 偏見をなくす力（反偏見）

- 文化の違いを知り、それぞれのよさを感じ・言える。
- 社会的に否定的に見られている仕事を正しく説明できる
- 障がい児・ジェンダーなどへのステレオタイプをなくそうとする
- 部落差別と戦ってきた人々のことを知り、共感する。
- だめな人間はいないし、人間の能力を発展していくものとして主張できる。
- おとなのきめつけに対して、おかしいといえる。

保育者自身の価値観を見直す

- 社会的な「常識」とされる固定的なカテゴリー分けを無批判に用いていないか
- 「まず当たり前のことを教えてあげないと」の当たり前は「当たり前」ではないかもしれない。
- 子どもの言動への反応（同性が結婚するのはおかしい、男らしく・女らしくなど、こうするのが「普通」）を問い直す
- 保育環境が固定的な価値観のみを反映したものになっていないか



保育者自身が持っている「普通」「当たり前」といった見方に揺さぶりをかけ、自分のものの見方や価値観、行動を見直すことが原点

私の当たり前は、あなたの当たり前でなくて当たり前
違いが必ずしも「分かりあえる」ものとは限らない。
分かり合えないほどの違いもあることを「分かる」ことが大切

(4) 人権力のトライアングルを実践に活かす

- 人権力のトライアングルは、「子どもの姿を理解し、保育課題を明確にする」際や「目指す集団像を明らかにする(ねらいを確定する)」際に、その方向性を確定するために重要な役割を担っています。
- 「子ども理解」にあたっては、人権力のトライアングルの視点を意識することによって、クラスの中にある矛盾や小さな偏見が見えてきます。そこから保育の課題を明確にすることも可能です。
- また、「目指す集団像」を明らかにする際には、人権力のトライアングルの視点から、クラスの子どもたちに育てたい力や見方をあきらかにすることが可能になります。

(5) クラス集団作りを考えるステップ

①子どもの現実を捉える (保育課題の明確化)



②ねらいの明確化

(目指す集団像・育てたい価値観と各時期のねらいを考える)



③活動内容を考える



④保育者の関わりを考える

(直接的関わりと間接的関わり)

終わりに

人権を大切にした保育の原点にある「保育者のこだわり」

- こだわりの背景にある「怒り」や「悲しみ」の感情
- 「自分事」と捉えるからこそ、実践に向かえる。
- この子どもたちに「どんな未来を生きて欲しいのか」ということ
- 子どもの側に立つということ。
- 先生方が豊かな実践を展開してくださることを期待します。